
夕立

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕立

【Nコード】

N6012Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

夕立に遭ってファミレスに飛び込んだ女の子二人。そこで彼女達を待っていたものは。アクセントからはじまるお話です。

第一章

夕立

下校中にだ。いきなりだった。

「うわっ!？」

「いきなり!？」

それが二人を襲った。

「傘は？」

「ないわよ」

一人がもう一人に言う。

「だってさっきまで晴れていたじゃない」

「そういえばそうね」

「折り畳み傘があればいいけれど」

「持つてる？」

「持つてないわよ」

これが一人の返答だ。茶色の長い髪をポニーテールにしている。大きなはつきりとした鳶色の目を持つ女の子だ。眉が太く黒がかっている。身体は小柄で赤いネクタイのセーラー服がよく似合っている。

「悪いけれど」

「悪いなんてものじゃないわね」

もう一人がここで言った。こちらは髪を桃色に染めてそれを頭の量上でそれぞれ角の様にしている。やはり小柄で明るく幼さの残る顔をしている。相手と同じセーラー服である。

「僕もだけれど」

「じゃあお互い様じゃない」

「あはは、そうだね」

桃色の髪の子松山真理耶が相手の神部林檎に対して返した。

「そういえばね」

「そうそう、一緒だよ」

「じゃあこのことはそれでいいとして」

「ええ」

「どうしようかしら」

真理耶はあらためてこう言うのであった。

「雨だけねど」

「どっかに雨宿りしようよ」

これが林檎の提案であった。

「何処かのお店で」

「お店でなの」

「うん、どっかに入ろうよ」

「ええと、それじゃあ」

真理耶はここで周囲を見回した。するとであった。

丁度いい具合にファミリーレストランがあった。その店を見てだつた。

「あそこに入る？」

「うん、入ろう」

林檎はすぐに真理耶の提案に頷いた。

「それじゃあね」

「とにかくこのまま雨の中に入れてもね」

「何もならないよ」

「そうよね。だからね」

また話す真理耶だつた。

「まずは中にね」

「身体や服も拭かないといけないし」

「そうよね、それじゃあね」

こうしてであった。二人はすぐにそのファミリーレストランに入った。その中は全体的に黄色系統の色で統一されドリンクバーやデザートのコナーが店の中央にあった。真理耶はそこを見て言うのであった。

「林檎、あれ見て」

「あつ、ドリンクにデザートに」

「あれ頼む？」

「こつ林檎に言うのだった。」

「お金見てから」

「お金つてどれだけあるの？」

「ええとね」

真理耶は自分の財布を出して中を見た。するとであった。

「千円」

「千円なのね」

「昨日CDに使っちゃったから」

「そうだったの」

「それで千円しかないんだ」

「それでだというのだ。」

「林檎はどれだけ持つてるの？それで」

「ええとね」

今度は林檎が財布を開いた。その結果あったのは。

「千円」

「同じね」

「そういえば今月色々買ったから」

「それでお互い千円しかないのね」

「フリードリンクはともかくフリーデザートは無理かな」

林檎は少し残念そうな顔で述べた。

「やっぱり」

「そうかもね。とりあえずメニュー見て決めよう」

「いけたらフリーデザートもね」

「そうしよう」

こつ」話してであった。二人はまず二人用の席に座った。そうしてそのうえでそれぞれメニューを開いた。するとであった。

第二章

「あつ、九八〇円」

「そうだね」

「九八〇円でフリードリンクフリーデザートって」

「いけるわよ」

「まずはこのことに喜ぶ二人であった。」

「しかも高校生限定」

「僕達の為にあるみたいなお話だね」

「そうよね」

林檎は真理耶のその言葉に頷いた。

「じゃあこれ行く？」

「そうしよう」

こうしてであった。二人はウェイトレスを呼んだ。するとであった。

「えっ!？」

「貴女は」

何とだ。出て来たウェイトレスはだ。二人が知っている人であった。

二人の部活の先輩でだ。その人が出て来たのである。先輩は憮然とした顔でそのうえでだ。二人に対してこんなことを言ってきた。今では青いふりふりの膝までの制服と白いエプロンの格好も目に入らない。

「あなた達部活は？」

「えっ、部活ですか」

「それですか」

「そうよ。新聞部の部活」

それが二人の所属している部活である。

「そっちはどうしたのよ。写真は撮れたの？」

「つていつか先輩もどうしてここに?」

「記事は書かれたんですか?」

「そっちは」

「書いたわよ」

黒いロングヘアの背の高い先輩はそのはっきりとした二重の目を怒らせて答えた。

「もうね」

「そうなんですか」

「もうなんですか」

「それであんた達写真は?」

先輩はまた二人に問うてきた。

「どうなったのよ」

「もう撮りました」

「それ出して今ここにいるんですよ」

「そうだったの。じゃあ私と同じね」

「はい、ちゃんとやることやってますから」

「それは安心して下さい」

こう先輩に釈明するのであった。それは完全に釈明であった。

「それでなんですけれど」

「注文は」

「何にするの?」

先輩はメニューの用紙を左手に、ペンを右手に二人に問う。

「それで」

「はい、フリードリンクとフリーデザート」

「セットで」

「それね」

先輩はぶっきらぼうに二人に返す。

「わかったわ。じゃあそれを二つね」

「はい、それで御願います」

「それで」

「それじゃあだけれど」

ここで先輩はさらに言ってきた。

「学生証見せて」

「えっ、学生証ですか!？」

「それをですか」

「高校生限定よ。だから高校生かどうか確かめる為にね。見せて」

「そんなの見せるまでもないじゃないですか」

「そうですよ」

しかし二人はこう言うのだった。

「同じ高校じゃないですか」

「わかってるじゃないですか」

「決まりは決まりだから」

しかし先輩は言う。

「だからよ。見せてよ」

「ちえっ、厳しいですね」

「絶対になんですね」

「そうよ、絶対によ」

あくまでこう言う先輩であった。

「わかったわね。それじゃあね」

「わかりました」

「仕方ないですね」

こうしてであった。二人は渋々その学生証を出そうとする。しかしであった。

「あつてよかつたわね」

そんな二人に素っ気無く告げる先輩だった。

「じゃあフリードリンクにフリーデザートね」

「はい、御願います」

「それじゃあ」

こうして二人は何かそのセットを頼めた。そのうえで早速皿の上にケーキやクレープやアイスクリームをてんこ盛りにしてそのうえ甘いジュースを持って来てだ。飲み食いをはじめた。

菓子もフルーツも飲み物も次々と二人の胃の中に消える。その時だった。

「ねえ林檎ちゃん」

「何、真理耶ちゃん」

「あのさ、あれどう？」

こう林檎に言ってきたのである。店の中央のそのドリンクやデザートのある場所を指差しての言葉である。

「あのお菓子」

「あつ、チョコレートフォンデュ」

「あれいいわよね」

溶けたチョコレートが上から下に流れている。それを見ての言葉だ。

「行く？」

「うん、行こう」

林檎は笑顔で真理耶の言葉に頷いた。

「それじゃあね」

「よし、じゃあ行こう」

こうして二人はそのフォンデュに向かった。しかしである。デザートチョコレートにかけようとするとだ。これが。

「あれ？」

「何これ」

「上手くかからない」

「そうよね」

細く長い串に突き刺したそれをチョコレートにかけよじると
だ。しかしこれがだ。中々上手くいかなかったのである。

「ただ通すだけなのに」

「何かムラができるけれど」

「どうしてよ」

「何かおかしいけれど」

「あのね、あんた達」

ここで二人のところに先輩が来て言う。

「何してるのよ」

「何ってチョコレートフォンデュ作ってるんですけど」

「そうですけれど」

「何勢いよく突っ込んでるのよ」

そんな二人を呆れた目で見ている。

「全く。そういうのじゃないのよ」

「そうなんですか？」

「突っ込むんじゃないんですか」

「突っ込むのじゃなくてかけるの」

先輩はこう二人に話す。

「ゆっくりと入れてね。それで塗るようにしてよ」

「それでやるんですか」

「そうだったんですか」

「全く。フォンデュ知らなかったのね」

「はい、ちよつと」

「実ははじめてです」

二人はあらためて先輩に話す。話をするその間もデザートを刺した串を手放さない。

第四章

「話には聞いてましたけれど」

「こんなのだったんですね」

「焦らず落ち着いてよ」

先輩は二人に教える。

「そうすればいいから」

「ゆつくりとなんですか」

「つまりは」

「そう。塗るようにしてよ」

先輩は二人に丁寧に教える。

「これでわかったわね」

「はい、それじゃあ」

「そうします」

こうしてだった。二人は先輩に教えてもらったようにフォンデュを作った。そうしてみると上手にできた。そしてそれを食べるのであった。

そんなことをしながら飲み食いをしてだ。ふと外を見ると。

「止んだね」

「そうね」

雨が止んだ。ここぞだ。

「じゃあ帰る？」

「そうする？」

林檎は真理耶のその言葉に応えた。

「結構食べたしね」

「それじゃあね」

それで帰ろうと立ってだ。カウンターに向かう。

するとそこには先輩がいた。そこから二人に言ってきた。

「お勘定ね」

「はい、御願ひします」

「これで」

「いいのね」

先輩は二人を見据えてからこう述べた。

「それで」

「それでつて？」

「もう雨止みましたし」

「外を見てみれば？」

先輩はここでこう言うのであった。

「外をね」

「だから止んでますつて」

「私達だつて今さつき外を見ましたから」

「男心と天気」

先輩はこんな言葉を出してきた。

「風の中の羽根の様なものよ」

「それつてどういうことですか？」

「どういう意味なんですか？」

「すぐに変わるもの」

そういう意味だというのだ。

「はい、それで外を見てみて」

「外つて」

「まさか」

そのまさかであつた。外はだ。土砂降りになつていた。

その十メートル先も見えないような土砂降りを見てだ。二人はうんざりとした顔になつて述べた。

「今さつき止んでたのに」

「何でなのよ」

「だから天気は変わりやすいの」

先輩はまた二人に話した。

「そういうことなのよ」

「そんな、じゃあ」

「今出たら」

「お勘定はまだしていないし」

先輩はここでもクールに言った。今度は指摘である。

「どうするの、それで」

「お店に残るかどうかですよね」

「つまりは」

「そうよ。どうするの」

また二人に対して問う。

「それで」

「残ります」

「また飲んで食べさせてもらいます」

二人は少しがっかりとして答えた。

「仕方ないですよね」

「これじゃあ」

「もっと飲み食いできると思って喜びなさい」

相変わらず冷めている。その目までもだ。

第五章

「それじゃあね」

「はい、そう考えます」

「それじゃあ」

二人は先輩のその言葉に頷いた。そうしてであった。

二人の席に戻ってそれでまた飲み食いをはじめた。その勢いは衰えておらずやはりジューズやケーキを次々と胃の中に収めていく。

小柄な二人だが食べる量はだ。かなりのものだった。

それで結構な時間が経った。まずは林檎が言った。

「ふう。もうね」

「お腹一杯？」

「うん、もう満腹」

満足した顔での言葉だった。

「だってかなり食べたし」

「そうだよ。僕だってね」

「真理耶ももう限界？」

「うん、限界」

その通りだというのである。

「食べられないわね、もう」

「そうよね。それじゃあ」

林檎はここでちらりと窓の方を見た。しかしだった。

「まだ降ってるわね」

「そうだね。中々降り止まないわね」

「どうする？それで」

林檎はここで真理耶に言った。

「止むまでだけれど」

「ううん、もう満腹だしね」

「そうだよ」

「何かお話でもする？」

真理耶の提案である。

「雨が止むまでの間」

「そうする？何でもいいから」

「うん、そうしよう」

こうしてだった。二人は学校の話をはじめた。友人やそうしたこととをだ。そうしてそんな話をしているうちにだ。こんな話にもなった。

「ねえ、先輩だけれどさ」

「先輩が？」

「最近綺麗になつてない？」

真理耶がまず言い出したのだった。

「何かね」

「あつ、そういえばそうよね」

林檎も言われて気付いた。

「何か最近特にね」

「メイクよくなつたとか？」

「あとお肌も綺麗になつたしね」

「髪もね艶がよくなつてね」

「そうそう。全体的に綺麗になつたわよね」

「何でかな」

「ここで言う真理耶だった。」

「それって何でかな」

「彼氏ができたとか？」

林檎はすぐにこんなことを言った。

「それでじゃないの？」

「彼氏が？」

「ほら、よくある話じゃない」

笑って真理耶に話す。

「女は恋をすればってさ」

「綺麗になるの？」
「だからじゃないかな」
「また言う林檎だった。」
「それでね」
「それでなのね」
「まあ彼氏が誰かはわからないけれどね」
「彼氏じゃなくて彼女かもね」
「真理耶は笑ってこんな冗談を口に出した。」
「いるかもね」
「そうだよね」
「聞こえてるわよ」
「しかしここでまたまた声がしてきた。」
「ちゃんとね」
「えっ、先輩」
「いたんですか」
「いたわよ。全く、人をレズみたいに」
「まあまあ」
「気にしないで下さい」
「愛想笑いでこう先輩に言う二人だった。」
「別に悪気はないですし」
「ですから」
「綺麗になった、ね」
「先輩はこの話も聞いていたのだった。それで言うのであった。」
「その言葉は嬉しいわ」
「どうもです」
「それは聞いてくれていましたね」
「それで彼氏ね」
「この話もする先輩であった。」

第六章

「できたわよ」

「あつ、やつぱり」

「そうなんですか」

「相手が誰かは内緒だけれどね」

「えっ、内緒なんですか」

「それはちよつと酷いんじゃない」

「じゃあヒントを出すわ」

何気に話に乗っている先輩だった。話をする間もその手にはオーダーとペンがある。そしてお盆の上に他のものもだ。

「同じクラスの子よ」

「ああ、じゃあ同じ学校の同級生の人ですか」

「お付き合いしてるんですね」

「そういうこと。楽しくやってるわ」

先輩は話しながら口元を微かに綻ばさせている。

「充実してるわよ」

「それはどうも」

「おめでとつございます」

「それでね」

ここまで話してであった。先輩は話を変えてきた。

「ここに来た理由は」

「はい、何ですか？」

「それで」

「はい、これ」

そのお盆からだ。あるものを二人のいるテーブルの上に置いてきたのだ。それは。

紅茶だった。二つのアイスティーである。

「どつぞ」

「あれっ、お茶ですか」
「フリードリンクなのですか」
「フリードリンクでも持って来たのよ」
「そうだといいのである。」
「あんた達暫く食べるのばかりだったでしょ」
「ええ、まあ」
「そういえば」
言われて気付く二人であった。実際に二人の前は皿がうず高く積み
まれている。それだけ食べたという何よりの証である。
「ケーキにアイスにフルーツに」
「クレープにフォンデュに」
「だからよ。飲み物も飲んだ方がいいわよ」
「こう話す先輩だった。」
「だからよ。どうぞ」
「有り難うございます」
「それじゃあ」
二人も先輩の言葉に頷いてた。その紅茶を飲むのだった。そうし
てさらに食べてそれが一段落した時だ。窓の外を見ると。
「あつ、やつと」
「そうね。遂にね」
二人はその窓の外を見て笑顔になった。
「止んだね」
「そうね。それじゃあね」
雨が止んだ。そして食べることも一段落した。するとだった。
「もう出ようか」
「そうね」
「それじゃあね」
「こうしてであった。カウンターに向かう。」
そこにはやはり先輩がいた。その先輩が言うのであった。
「まだ帰ったら駄目よ」

「えっ、何ですか？」

「雨ですか？」

「持ち物チェックよ」

「それでだというのだ。」

「それでなのよ」

「それでって」

「私達別に取ったりとかは」

「忘れ物よ」

「忘れ物!？」

「忘れ物って」

そう言われてだ。二人はまずはそれぞれいぶかしんだ。しかしであつた。

ここだ。先輩は二人の手を見ながら言ってきた。

「鞆は？」

「あっ、そういえば」

「忘れてました」

二人も言われてそれに気付く。

「それは」

「席に置いたままです」

「早く取ってきなさい」

先輩はクールな声で述べる。

「同時に他に忘れ物がないかどうかも確かめなさい」

「はい、わかりました」

「それじゃあ」

二人はカウンターの前に姿勢を正してそれで自分達がいた席に戻る。それで鞆を手にとって他に忘れ物がないかどうかチェックしてだ。そのうえでカウンターに戻った。

そこでお金を払ってからだ。店の外に出るとだった。

雨はもう止んでいた。空は晴れようとしていた。

「色々あつたけれどね」

「そうだね」

林檎は笑顔で真理耶の言葉に応える。真理耶も笑顔である。

「楽しかったね」

「美味しかったしね」

「そうそう、また来よう」

「そうしよう」

二人はフリードリンクフリーデザートのことも笑顔で話す。

「雨が降った時は参ったけれどね」

「何か止んでみれば」

その雨の後での言葉である。

「気持ちいいね」

「本当にね」

二人は満面の笑顔で再び帰路に着いた。突然の雨がもたらした道草はだ。二人にとっては実に楽しいものになったのだった。

夕立 完

2010・9・3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6012q/>

夕立

2011年2月2日22時10分発行